

タブ 1

【本文】

さて、a(この男)、その年の秋、西の京極九条のほとりに行きけり。そのあたりに、築地など崩れたるが、さすがに葺など上げて、簾かけ渡してある人の家あり。簾のもとに、女ども、あまた見えければ、この男、ただにも過ぎで、「などか、その庭は心 すごげに荒れたる」など言ひ入れたれば、「誰ぞ、かう言ふは」など問ひければ、「なは、道行く人ぞ」と言ひ入る。築地の崩れ より見出だして、b(この女)、

①(人のあきに庭さへ荒れて道もなくよもぎしげれる宿とやは見ぬ)

と書きて、出だしけれど、もの書くべき具さらになかりければ、ただ口移しに、男、

誰があきにあひて荒れたる宿ならむわれだに庭の草は生さA

と言ひて、そこに久しく馬に乗りながら立てらむことの、しらじらしければ、帰りて、それを始めにて、ものなど言ひやりける。「もし、籠もりゐてすかす人もこそ B 」と思ひて、たえてその人の家とも言はざりければ、ねむごろにも尋ね問はで。

さて、なま疑ひてぞ、時々もの言ひやりける。

ほど久しくありて、また人やりたるに、「ここにおはしましし人は、はや、ものへおはしにき」とて、くちをしき者、ただ一人ぞをりける。「もし、人たまはば、取らせよ」とて、これなむたまひ置きたる」とて、いささかなる文ぞある。使、「しかじ かなむ言ひつる」とて、語れば、あやしと思ひて、「もし、行き所や C」とて、急ぎ開けて見れば、ただかくなむ、

②(わが宿は奈良の都ぞ男山越ゆばかりにしあらば来て問へ)

とのみありければ、男、いたく思ひくちをしがりて、この住みけるところに人やりて、宿守に物くれさせて問へど、「ただ奈良へとなむ承る。それより異所は、ここかしことも承らず」と言へば、尋ねむ方なくなむ。奈良と聞きては、いづくをいづこと か尋ねむと思ひて、しばしこそありけれ、思ひ惹れて、年月になりぬ。

さて、この親、忍びて初瀬へ詣でけり。ともに、この男も詣でけり。「男山越ゆばかり」とあることを思ひ出でて、「③(あはれ、さ言へる人のありしはや)」とぞ、供なる人に語らひける。さて、初瀬へ詣でにけり。

帰り来けるに、飛鳥本といふわたりに、あひ知りてある大徳たちも、c(俗)も出で来て、「今日は日はしたになりぬ。奈良坂のあなたには、人の御宿りもなし。ここにとどませたまへ」と言ひて、門並びに、家二つを一つに造り合はせたるが、をかしきにぞとどめける。さりければ、とどまりにけり。あるじなどし、人々もの食ひて、騒がしきこと静まりて、なま夕暮になりにけり。この男、門の方にたたずまひて見けり。この南なる家の門より、北なる家までは、櫓の木といふを植ゑ並めたりけり。「あやしくもあるかな。異木もなく、これしも」など言ひて、この北なる家にはひ入りて、さしのぞきたりければ、葺などさし上げて、女ども、あまた集まりをり。「あやし」など、おのがどち集まりて、d(この男の供なる人)を呼ばせて、「こののぞきたまへる人は、この南に宿りたまへるか」と問ふ。「さなり」。「さて、その人ぞ」など問へば、この男の名をぞ答へける。いといたう、おのがどち言ひあはれがりて、「われ、いかに。築地の崩れより、一目見しを忘れざりけり」。それをほのかに聞きて、この男は、「それなるべし」と思ひて、「あやしくもありけるかな。ここにしも、かう宿りに

けるよ」と思ふに、嬉しくもあり、また、「男の迎へて据ゑたるにやあらむ」など、④(とにかく思ひ乱れてゐたるに)、かく言ひ出だしたり。

くやしくぞ奈良へとだにも告げてけるたまほこにだに來ても問はねば

と書いて出だしたるを見れば、かの「庭さへ荒れて」と⑤(言へりし)人の手なり。京のなまゆかしうなりゆけるに、あはれしう、をかしうぞおぼえける。

(「平中物語」による)

(注)

- ・○西の京極九条のほとり＝右京の京極大路と九条大路の交錯するあたり。人家が少ないエリアであったとされる。
- ・○しらじらしければ＝きまりが悪いので。
- ・○くちをしき者＝ここでは召使い(めしつか)のこと。
- ・○いささかなる文＝小さく巻き畳んだ手紙。
- ・○男山＝現在の京都府八幡市にある山。その山上に石清水八幡宮がある。
- ・○初瀬＝長谷寺のこと。現在の奈良県桜井市初瀬に所在する寺院。
- ・○飛鳥本＝地名。現在の奈良県奈良市の一部。
- ・○大徳＝ここでは僧のこと。
- ・○俗＝僧ではない一般の人々。
- ・○日はしたに＝旅を続けるには中途半端な時間に。
- ・○たまほこにだに＝ここでは「その道すがらにさえ」の意味。

タブ 2

【問題】

問一 傍線部①「人のあきに庭さへ荒れて道もなくよもぎしげれる宿とやは見ぬ」の和歌に用いられている修辞法の説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。 解答番号 [21]

- ①「人のあき」の「あき」は、空き家の「空き」と世間の人々に「飽きられる」の「飽き」とを掛けた掛詞である。
- ②「人のあき」の「あき」は、空き家の「空き」と季節の「秋」とを掛けた掛詞である。
- ③「人のあき」の「あき」は、季節の「秋」と男に「飽きられる」の「飽き」とを掛けた掛詞である。
- ④「人のあき」の「あき」は、季節の「秋」と世間の人々に「飽きられる」の「飽き」とを掛けた掛詞である。

問二 空欄 [A] ～ [C] を補うのに、最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。 解答番号 [22]

- ① A む B ある C なし
- ② A め B あれ C あれ
- ③ A じ B ある C なき
- ④ A じ B あれ C ある

問三 傍線部②「わが宿は奈良の都ぞ男山越ゆばかりにしあらば来て問へ」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。 解答番号 [23]

- ① 私の家は奈良の都にあります。もしも男山を越えてこちらに来るようなことがあれば、お訪ねください。
- ② 私の家は奈良の都では知らない人はいません。男山を越えたあたりで村人に尋ねてみるとよいでしょう。
- ③ 私は奈良の都に宿泊しています。もしも男山を越えて来るというのなら、使者をここに遣わしてください。
- ④ 私は奈良の都に宿泊しています。男山の高さをしのぐ程の熱意があるというのなら、早くここに来てください。

問四 傍線部③「あはれ、さ言へる人のありしはや」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。 解答番号 [24]

- ① ともあれ、そのように言う人はいないだろうなあ

- ② そのような古歌を口ずさむ人はすばらしいなあ
- ③ ああ、そのような歌を詠んだ人もいたなあ
- ④ この趣深さを表現できる人がいてくれたらなあ

問五 傍線部④「とにかく思ひ乱れてゐたるに」の主語として最も適当なものを、この文章の波線部 a～d の中から一つ選びなさい。 解答番号 [25]

- ① a この男
- ② b この女
- ③ c 俗
- ④ d この男の供なる人

問六 傍線部⑤「言へりし」の「し」と文法的に同じ語を一つ選びなさい。 解答番号 [26]

- ① ありと(し)ある人は、皆浮雲の思ひをなせり。
- ② 時(し)もあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを
- ③ 浜には、くさぐさのうるはし(き)貝・石など多かり。
- ④ 鬼のやうなるもの出で来て、殺さむとし(き)。

問七 この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。 解答番号 [27]

- ① 男は、ある年の秋、西の京極九条のあたりに行ったとき、趣深く風情のある家を見つけた。そして、家の中の女に「どうしてそんなに騒々しくしているのですか」と尋ねた。
- ② かなり日数がたってから、男が西の京極九条のあたりの家に使いの者をやったところ、その家の召使いは「この家にいらっしゃったのなら、早く男山の石清水八幡宮に参詣なさいませ」と言った。
- ③ 男は長谷寺に参詣した帰り道、飛鳥本という所に泊まることとなった。その地で、西の京極九条のあたりで歌を詠み交わした女と偶然にも再会することができた。
- ④ 男が宿泊した建物の北の方にある家の中では、大勢の女性たちが集まっていた。それを見た僧侶たちは「不都合なことだ」と言って、供の者を召使いに呼んでこさせた。

問八 この文章は『平中物語』の一節ですが、この作品と同一ジャンルの作品として最も適当なものを一つ選びなさい。 解答番号 [28]

①『源氏物語』

②『大和物語』

③『雨月物語』

④『竹取物語』

タブ 3

【解説】

問一 解答:③

【解説】掛詞の基本中の基本だ。落とすと命取りになる。

「あき」と来たら、まずは「秋」と「飽き(厭き)」の掛詞を疑おう。これは平安古文の常識！

- ・文脈:男が来なくなって庭が荒れている。
- ・理由1:季節が「秋」だから草が枯れている。
- ・理由2:男が女に「飽き」で通わなくなったから手入れされず荒れている。

この二重の意味を持つ選択肢は③しかない。

問二 解答:④

* 前後の「接続」と「係り結び」に注目

- ・A[じ]:「生さA」。直前の「生さ」は未然形だ(四段活用「生す」)。文脈は「(自分なら)庭の草を生やさないだろう(＝手入れをするのに)」。
- ・B[あれ]:「人もこそB」。「こそ」がある▶これは係り結び。文末は已然形になる。ラ変「あり」の已然形は「あれ」。
- ・C[ある]:「行き所やC」。「や」(疑問の係助詞)がある。文末は連体形になる。「あり」の連体形は「ある」。

正解は④。

問三 解答:①

【解説】直訳と文脈のバランスを見よう。

「男山越ゆばかりにしあらば」

- ・「男山」＝京都と奈良の境にある山。
- ・「ばかり」＝～くらいの程度。
- ・「に・し・あら・ば」＝断定「なり」連用形＋強意副助詞「し」＋ラ変「あり」未然形＋接続助詞「ば」。「～であるならば」。

つなげると「(京都から)男山を越える(労力を払う)くらいであるならば、来て尋ねてくれ」となる。

「男山を越えてこちらに来るようなことがあれば」と素直に解釈している①が正解。④の「熱意」は深読みのしすぎ！

問四 解答:③

【解説】「感動」の方向性をつかめ。

「あはれ、さ言へる人のありしはや」

- ・「あはれ」= ああ(感動詞)。
- ・「さ言へる人」= (以前の歌で) そのように言った人(あの女)。
- ・「ありし」= 過去の助動詞「き」の連体形。「いたのだなあ」。
- ・「はや」= 詠嘆。「～だなあ」。

男が実際に男山を越えている時に、かつて女が「男山を越えて来て」と歌ったことを思い出し、「ああ、本当にそんなことを言った女がいたなあ(懐かしい)」と回想している場面！

問五 解答:①

【解説】主語判定は古文の生命線！

直前の文脈を見よう。「あやしくもありけるかな(不思議なことだなあ)」と思っているのは誰だ？

男が女の家の様子を覗き見して、「男が迎えて据ゑたるにやあらむ((この女は)新しい男が迎えてここに住まわせているのだろうか)」と疑っている場面だ。

つまり、思い乱れているのは、元カレである「a この男」だ。

問六 解答:④

【解説】品詞分解の精度が問われる。

「言へりし」の分解:

- ・言へ(動詞・命令形...ではなく、完了「り」がつくので已然形とみなす

※四段活用の已然形+完了「り」)

- ・り(助動詞・完了・連用形)

- ・し(助動詞・過去「き」・連体形)

つまり、過去の助動詞「き」を探す問題だ。

- ①「ありとしある」＝「し」は強意の副助詞。
- ②「時しもあれ」＝「し」は強意の副助詞。
- ③「うるはしき」＝形容詞「うるはし」の連体形活用語尾の一部。
- ④「殺さむとし(き)」＝サ変「す」の連用形「し」＋過去の助動詞「き」。

問七 解答:③

【解説】ストーリー展開を大雑把に追う。

- ①: 男は「誰ぞ、かう言ふは(誰だこんなことを言うのは)」と言われた側。尋ねたのではない。×
- ②: 召使いは「奈良へ」としか聞いていない。「男山の石清水八幡宮へ行け」とは言っていない。×。
- ③: 男は長谷寺(初瀬)の帰りに、飛鳥本に泊まり、そこで「櫓(なら)の木」を見て、女の歌「奈良の都」を思い出し、隣家に女がいることを知る。これが正解。
- ④: 僧侶(大徳)ではなく、女たち(おのがどち)が騒いで、男の供人を呼ばせたのだ。×。

問八 解答:②

【解説】

『平中物語』は歌物語だ。

- ①『源氏物語』＝作り物語。
- ②『大和物語』＝歌物語。『伊勢物語』『平中物語』とセットで覚えるのが鉄則。正解。
- ③『雨月物語』＝江戸時代の読本。時代が違う。
- ④『竹取物語』＝作り物語の祖。

【ポイント】

1. 「係り結び」と「助動詞の接続」は確殺！

知識さえあれば10秒で解けるボーナス問題。

2. 主語の切り替わりをマーク！

敬語が少ない文章(今回のような歌物語)では、文脈と「誰が覗いているか」「誰が家にいるか」という立ち位置の把握が重要。

3. 掛詞は「秋＝飽き」「日＝非」など定番を押さえておく。

深読みは不要。問一のように、受験古文で問われる掛詞のパターンは決まっている。

タブ 4

【練習問題】

■第一部: 文法・語法

Q1. 【掛詞】

和歌の中で「あき」という言葉が出てきたら、疑うべき二つの漢字(意味)は何と何か？

Q2. 【係り結び】

「～こそ」で文が結ばれる場合、文末の活用形は何形になるか？

Q3. 【係り結び】

「～や」「～か」(疑問・反語)で文が結ばれる場合、文末の活用形は何形になるか？

Q4. 【助動詞の接続】

打消推量の助動詞「じ」は、動詞の何形に接続するか？

Q5. 【助動詞の識別】

完了の助動詞「り」は「サ変の未然形」と、もう一つ、何段活用の何形に接続するか？(※「リカちゃんさみしい」の法則)

Q6. 【助動詞の活用】

過去の助動詞「き」の連体形は何か？

■第二部: 文学史(常識)

Q7. 【ジャンル】

『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』。これらに共通する文学ジャンルを何というか？

タブ 5

【練習問題の解説】

A1. 「秋」と「飽き(厭き)」

> 解説

> 基本中の基本だ。「秋」の寂しい情景と、相手への恋心が冷める「飽き」を掛けるのが黄金パターン。

> 和歌で「あき」を見たら、文脈が恋の歌でないか即座にチェック！

A2. 已然形

> 解説

> 「こそ→已然形」で文が終わるのは当たり前。

> 文末ではなく、文中で**「こそ～已然形、」と読点(、)で続く場合は、「逆接(～けれども)」と訳せ。

> (例: 風こそ吹け、雨は降らず。→風は吹くけれど、雨は降らない。)

> これを知らないと、文脈を真逆に捉えて自滅！

A3. 連体形

> 解説

> 「ぞ・なむ・や・か」は連体形。「こそ」だけが已然形。

> リズムで覚えろ。疑問・反語の識別は文脈判断だが、まずは形を間違えないで！

A4. 未然形

> 解説

> 「～じ」(～ないだろう/～まい)は未然形接続。「行か・じ」「見・じ」となる。

> 意志・推量の助動詞「む」と同じ接続だ。セットで頭に入れよう。

A5. 四段活用 of 已然形

> 解説

> 接続は「サ・未・四・已(さみしい)」と覚えるのが定石。

* テクニック

> 活用の種類を忘れたら、音で判断。直前の音が「エ段(eの音)」+「り」なら、それは完了の「り」だ。

(例: 書け(kake)+り / 言へ(iuhe)+り)

A6. し

> 解説

> 活用は「(せ)／○／き／し／しか／○」。

> ★実戦での識別眼

> 文中で「し」が出てきたら、次の3つを疑う。

> * 副助詞の「し」(強意・訳さなくていい)

> * 形容詞の語尾(美し、など)

> * 過去の助動詞「き」の連体形

> 特に、動詞のすぐ後にあり、そこで意味が切れるようなら「過去」の可能性が高い。

A7. 歌物語

> 解説

> 和歌を中心とした短い物語集。「伊勢・大和・平中」はセットで暗記！

> ちなみに『源氏物語』のような長編は「作り物語」と言う。区別しておこう。

タブ 6

【頻出ランク別、必須の掛詞】

■ランクS

1. まつ

- ・【表】松(植物)
- ・【裏】待つ(恋人を待つ)
- ・※「松」が出てきたら、99%「あなたが来るのを待っています」という恋の歌だ。

2. ふる

- ・【表】降る(雨・雪が降る)
- ・【裏】経る・古る(時間が経つ・古くなる・年を取る)
- ・※「雨」とセットなら「涙」や「恋の時間の経過」を暗示する。

3. ながめ

- ・【表】長雨(長く降り続く雨)
- ・【裏】眺め(物思いにふけてぼんやり見る)
- ・※『伊勢物語』や『源氏物語』で超頻出。「雨＝憂鬱＝物思い」の方程式だ。

4. あき

- ・【表】秋(季節)
- ・【裏】飽き(相手に飽きる・嫌になる)
- ・※「風(＝飽きが来る兆し)」とセットで使われることも多い。

■ランクA: 恋愛セット

恋の歌(相聞歌)で頻出！

1. おもひ

- 【表】思ひ(思考・想い)
- 【裏】火(胸の中で燃える恋の炎)
- ※「下(した)もえ」や「煙」などの縁語と一緒に使われる。

2. うき

- 【表】浮き(浮草・浮かぶ)
- 【裏】憂き(つらい・苦しい)
- ※「浮草」のように根無し草でふらふらする自分と、つらい心情を掛ける。

3. みるめ

- 【表】海松布(みるめ＝海藻の一種)
- 【裏】見る目(会う機会・見る目)
- ※「海女(あま)」や「刈る」とセットで出る。「あなたに会う機会がない」と嘆く歌が多い。

4. よる

- 【表】夜(Night)
- 【裏】寄る(近づく)
- ※「波」が寄せるイメージと重ねることが多い。

■ランクB: 特定の語とセットで出る「ワンパターン」

1. あふ

- 【表】逢ふ(恋人に会う)
- 【裏】葵(あふひ＝植物のアオイ)
- ※賀茂祭(葵祭)の文脈でよく出る。

2. しる

- 【表】知る(know)
- 【裏】領る(土地を治める・領有する)
- ※「道」や「国」に関する歌で出たらこっちだ。

3. な

- 【表】名(名前・評判)
- 【裏】菜(野菜)
- ※「摘む」という動詞があれば、確実にこの掛詞

4. たつ

- 【表】立つ(Stand)／発つ(出発する)
- 【裏】裁つ(着物を切る)
- ※「衣(ころも)」の縁語として使われる。

【実践テクニック: 掛詞の見抜き方】

入試で「掛詞を指摘せよ」と言われたら、以下の手順で探そう！

1. ひらがなを探す

- 漢字で書かれているものは掛詞になりにくい。ひらがな部分に注目！

2. 不自然な「自然描写」を疑う

- 恋の話をしているのに急に「松」や「雨」が出てきたら、そこがポイント！

3. 「修飾語」とのズレを見る

- 「いたづらにふる」→「無駄に(時間が)経つ」＋「(雨が)降る」の両方の意味が通るか確認する。

